

ダンボールコンポストで堆肥づくり

家庭で手軽にできるダンボールコンポストで生ごみの堆肥化にチャレンジしてみましょう。ダンボールは軽くて通気性がよく、生ごみの水分を逃がしたり、発酵に必要な空気を通すのに適しています。

<作業手順>



<用意するもの>

- ・二重になったダンボール箱 (みかん箱程度)
- ・蓋用・中敷用ダンボール
- ・ピートモス (水分調整剤)
- ・くん炭 (消臭剤)
- ・棒温度計



1. ダンボール箱の蓋の部分を立てて、4箇所ともガムテープで隙間を止めます。底の部分にダンボールで一枚中敷を作って敷き、蓋も箱に合わせて作ります。蓋は保湿・防臭の役目をし、虫の侵入も防ぎます。
2. ダンボール箱の中に、「ピートモス」と「くん炭」を6：4の割合で入れ、よくかき混ぜます。これで肥料床の完成です。
3. 水気を切った生ごみを入れ、かき混ぜます。生ごみが直接ダンボールに触れないように注意してください。生ごみの投入は1日500gを目安に、また生ごみはなるべく細かくした方が分解が早く進みます。
4. 分解の進行具合を見るために温度計をさします。発酵・分解しているときは温度が上がりますので目安になります。虫や悪臭の発生を防ぐために、ダンボールの蓋をします。通気性をよくするために、箱の下に隙間を作るのがポイントです。

※ 一日に1回は攪拌しましょう。

※発酵分解が始まるのに、生ごみを入れてから1～2週間かかります（季節によって変わります）。分解が始まると温度が上がって40～50℃くらいになります。毎日生ごみを入れてもしっかり分解してくれますので、箱の中の量はほとんど増えません。

<注意点>

- 箱は通気性を保つため、ビニールなどで覆わないでください。
- 設置場所としては雨の当たらない所に、冬場は室内（台所）に置いてかまいません。
- 生ごみを入れない日でも一日一回はよくかき混ぜてください。
- 温度が上がらない時は廃油や米ぬかを入れてください。（入れすぎには注意）
- 植物性の生ごみだけではなかなか温度が上がりにくいです。動物性の生ごみ（魚のアラ・皮や骨など）も入れていただいてもかまいませんが、入れすぎると悪臭が発生しやすくなります。

<中に入れないほうがよいもの>

- 塩分の多いもの
- 鶏などの骨・貝殻
- ビニール・ナイロンなどの破片
- 固い繊維質のもの（とうもろこしの芯・たまねぎの皮など）

<堆肥として使用するためには>

1. 一日あたり平均500gの生ごみを投入しても、1つのダンボールコンポストで3ヶ月程度生ごみを処理することができます。
2. このコンポストでできた堆肥はそのまますぐに肥料にはなりません。穴を掘って堆肥を入れ、その上に草や枯葉などをかぶせて3～4週間おいた後、土に鋤き込んで下さい。

※あまり厳密に考えるとめんどろになりがち。分解できないものは最後まで残りますので取り除いて下さい。



※全ての生ごみをダンボールで処理しようと思わず、そのときの判断でゆるやかに楽しみながらチャレンジしましょう。

生ごみの内訳

H17.10 京都市環境局資料

